平成二十五年度　卒業記念川柳

平成二十六年三月一日

いつからか　母の前行く

（息子の成長を楽しみに歩んできた人生。親の手を離れ寂しい気持ちはあるけれど、これからは少し離れたところから、その歩みを温かく見守り続けます。卒業おめでとう。）

あと一歩　夢破れたが　悔いはなし
鏡見て　汗したあの日　恋しがる
これからは　希望に満ちた　未来へと
楽しても　何とかなるさ　人生は
このメンバー　卒業式に　涙なし
呉港より　厳しい社会　耐えられぬ
今までの　涙は全部　卒業に
いつまでも　笑っていたい　教室で
卒業は　大きな夢への　第一歩
寂しさが　嬉しさよりも　日々に増し
ありがとう　母さん父さん　先生も
三年間　何も変わらず　時は過ぎ
我が母校　家から近いが　遠くなる
四月から　本当の勝負　気合い入れ
今日までの　愛情感謝　倍返し
できるなら　時計をあの日に　巻き戻し
いつまでも　タダ飯食える　わけじゃない
みろくから　始まる奈落　次登山
三年間　忘れずに　数ヶ月
つらかった　進路が決まる　なかったなあ
僕らには　恋のこの字も　三年間
厳しさに　耐えて良かった　忘れない
これからも　感謝の気持ち　来たかった
街中の　文化を持って　寝たことだ
悔いはある　最後の授業で　早かった
あの日から　三年間が　ただ感謝
ありがとう　父と母には　ありません
怒られた　こと記憶　語り合おう
いつの日か　会うあれば
あと少し　仲間達との　思い出も
忘れない　共に過ごした　友のこと
三年も　待ちに待った　祝卒業
卒業は　嬉しけれど　先不安
あとわずか　楽しした日々も　もう終わり
これからは　自分ひとりで　生きてゆく
友達と　出会えたことが　デスティニー
入部して　初めライバル　今は友
この俺が　柄にもない　ありがとう
溢れ出す　光る涙と　思い出が
ありがとう　ただひたすらに　ありがとう
自立して　夢の階段　一歩ずつ
ナミダ汗　色んな思い出　個々にあり
こいつらと　過ごした時は　宝物
卒業か　夢も希望も　持てぬまま
笑おうが　泣こうが最後　卒業式
最後まで　謎で終わった　指導室
三年間　夢と白球　追い続け
晴れの日　笑顔も涙も　よく似合う
呉港での　思い出そんなに　悪くない
卒業で　ようやく解放　部活動
頑張った　レギュラー目指し　三年も
さようなら　それは言わずに　また会おう
担任の　お寒いギャグも　もう聞けぬ
最後まで　思い続けた　辞めたいと
気がつけば　就職決まり　早卒業
綱渡り　落下寸前　生き残り
辞めたいと　思っていたら　もう卒業
やり抜いて　悔いを残さず　出て行きたい
歩いてく　自分の足で　しっかりと
辛いこと　楽しいことの　倍あった
卒業で　怒みつらみも　雪解けに
つらかった　それでも最高　呉港高
笑えたね　おでんのけで　親呼ばれ
過ぎ去った　嵐のような　三年間
住めば都の　三年間
地獄でも　ありがとう
毎日を　過ごした仲間に　大きくて
耐えた分　得た喜びは
【保護者作】
ありがとう　この一言に　涙出る
弁当の　おかず考え　ボケ防止
巣立ちの日　嬉しさ反面　寂しさも
十六で　呉港と出会い　花開く
行くたびに　母は他人の　参観日
五人抜き　宝物
母のすね　果たした姿　ちらずあろうか
子と共に　成長したと　今思う
我が時より　涙止まらぬ　あと二年
出会えたね　一生涯の　仲間達　卒業式
真っ直ぐに　夢追う息子　我が誇り
夢追って　あきらめないで　乗り越えて
顔見ると　親になれてと　胸熱く
子も親も　良き縁終生　大切に
【三学年教員はなむけ川柳】
新たなる　呉港の伝統　築き行く
足元の　彩り変わる　思い出に
綱渡り　なんとか乗り　越え　おめでとう
目標も　自己啓発も　エンドレス
意志を持て　多数決ない　人生は
夢を持ち　信じた道を　つき進め
暦見て　もうすぐ別れ　来るのかな
歩きゆけ　自分の足で　一歩ずつ
無理をせず　できることから　確実に
我が道を　初心に戻り　焦らずに
教え子に　光明みえし　あすの道
音を奏で　ハーモニー
人生は　あとで必ず　楽がある
苦は先に　持ち生きよ
夢は見ず　叶える気概